The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	顕示行為としての『商売の手引き』編纂 : ペゴロッティの『手引』を一例に
Author(s)	森, 新太
Citation	パブリック・ヒストリー. 2016, 13, p. 79-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66550
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Journal of History for the Public, **13** (2016), pp. 79-92 ©2016 Department of Occidental History, Osaka University. ISSN 1348-852x
Compiling Commercial Manuals as Means of Admiration for one's Profession: Pegolotti's "La Pratica della Mercatura"
Arata MORI

特集　支配者たらしむるもの

顕示行為としての『商売の手引き』編纂

ペゴロッティの『手引』を一例に

森　新太

はじめに

中世後期のイタリア諸都市において、その社会的主役を担ったのは商人である。かれらは為替や複式簿記などの高度な商業技術を発展させ、経済的に大きな成功を収めた。そうした成功を背景に、かれらは都市政治へも大いに進出し、その中心を占め、権力を握ることとなる。しかし、利を得ることに執着し、現世的行動に徹する商人たちは、当時のキリスト教倫理観の影響から、聖職者たちの批判の的となった。(1) 商人たちは、その手中に収めた権力に見合った社会的評価を得られなかったといえる。

そこで本稿では、14 世紀から 15 世紀にかけて、特にフィレンツェ商人たちが、文化的活動を通じて社会的尊敬を獲得し、権威もともなった社会的地位を確立しようとした試みを検討する。具体的には、かれらの手による著作ジャンルの 1 つである『商売の手引』、もしくは『実務百科』(以下『手引』) とよばれる史料群を考察対象とする。(2) これらはその名の通り商業マニュアルであり、実務的な情報や知識が大部分を占めるが、特に 15 世紀までに編纂されたものには商業に直接関係しない幅広い分野からの知識も含まれている。ひとくちにマニュアルといっても、編纂された時代や地域によってさまざまな特徴を見出すことができると考える。

(1)　こうした商人・商業へのまなざし（あるいは、蔑視）と、商人たちの自己意識、またそれらの中世後期から近世初頭にかけての変遷については、以下の研究が参考となる。大黒俊二『嘘と貪欲――西欧中世の商業・商人観』名古屋大学出版会、2006 年（以下、『嘘と貪欲』）。

(2)　『商売の手引 il manuale di mercatura』、および『商業実務 la pratica della mercatura』。これらは史料の原題ではなく、後世の研究者が名付けたものである。

1 『商売の手引』をめぐる議論

現存する最古の『手引』は 1270 年代にヴェネツィアで編纂された。[3] その誕生の背景には、12 世紀以降からみられる商業形態の変遷があるとされている。商品とともに商人自身が市場を転々と移動する「遍歴型」から、本拠地となる都市に定住し、各地に代理人、支店を配置することによって取引をおこなう「定着型」への変遷である。この変遷には当時並行して起こっていた定期連絡網の確立が強く関係しており、契約、指示の伝達、為替や情報のやり取りなどが手紙を媒介にしてなされていた。[4] 1 つの商会が従事する商業活動が多角化していく中で、常に更新される大量の情報を整理し、各市場に関する知識に精通する必要性が生じた。

一方で手紙や契約書といった、文字を用いた取引に頼ることから、商人の必須能力として、またその教育の初歩として「読み書き」が非常に重要視されるようになる。そうして識字能力を身に付けた商人たちは、当時の人文主義の影響を受け、過去及び同時代の書物を読み、そして日々の活動を文字を通して記録していた。[5] こうした情報、知識の整理の必要性と、「読み書き」に親しんでいた状況が、『手引』という著作ジャンルの登場をうながしたのである。

『手引』に関する研究は古く、18 世紀には、本稿で中心的に考察するフィレンツェ商人ペゴロッティによる『手引』が刊行されている。[6] ジャック・ル・ゴフはこの著作ジャンルについて、商人たちが情報や職業的技術、知識を俗語で編纂した、教会的な学問とは対照的位置にある知的作品であると説明している。[7] その具体的な内容の特性については、フークとジャナンが 1470 年以降の印刷された『手引』を目録化し、その内容を分類している。[8] かれらは『手引』の歴史的変遷を探り、ヨーロッパの商業中心地の移行にともない、編纂中心地が 15 世紀までの北イタリアから 16 世紀以降はイギリス、オランダなどへ移ったことを示した。同時にその内容の主体が商業情報の集積から、算術や簿記などの知識書へと変化するさまを明らかにした。

大黒俊二は『手引』を商人の文化を色濃く表現するものとして注目し、[9] 商人たちが情報管理や後進育成といった問題を解消するために、商業活動に必要な情報、知識を体系的に編纂し

---

(3) 以下は 22 篇の 13 世紀末から 16 世紀初頭までの、イタリアで編纂された『手引』を一覧表にしている。Orlandi, Angela, *«Ora diremo di Napoli»: I traffici dell'area campana nei manuali di commercio*, Firenze, 2012, pp. 19-30.

(4) 郵便連絡網の実体に関する研究としては、例えば以下を参照。Frangioni, Luciana, *Organizzazione e costi del servizio postale alla fine del Trecento*, Prato, 1983.

(5) Bec, Christian, *Les Marchands écrivains: Affaire et humanisme à Florence (1375-1434)*, Paris, 1967, p. 441.

(6) Pagnini del Ventura, Gio Francesco, *Della decima e di varie altre gravezze imposte dal comune di Firenze, della moneta e della mercatura de' fiorentini fino al secolo XVI*, tomo 3, Lisbona e Lucca, 1766, ristampa amastatica, Bologna, 1967.

(7) Le Goff, Jacques, *Marchands et Banquiers du Moyen Age*, Pr. Univ. de France, 1956, pp. 103-104.

(8) Hoock, J., und Jeannin, P., hrsg., *Ars Mercatoria*, Band 1: 1470-1600, Scöningh, 1991. これは、1470 年以降に印刷出版された『手引』を目録化し、その内容や出版地を分類することで、『手引』の歴史的変遷を探る研究である。

(9) 大黒俊二「『商売の手引』、あるいは中世イタリア商人の「実務百科」」中村賢二郎編『都市の社会史』ミネルヴァ書房、1983 年（以下、「『商売の手引』」）。同「『完全なる商人』、あるいはルネサンス商人の「百科全書」」中村賢二郎編『歴史のなかの都市――続都市の社会史』ミネルヴァ書房、1986 年（以下、「『完全なる商人』」）。

たものではないか、としている。[10] 大黒は『手引』に含まれる知識の幅広さ、記述の豊かさから、商人たちの実務と当時の知的文化との接点を見出すことのできる史料である、と評価する。特に 15 世紀後半のラグーサ商人コトルッリの手による『手引』の考察を通し、その内容に含まれる日々の行動規範や商人論から、著者がその『手引』を通して理想の商人像を掲げ、同時代の知識人層にアピールしようとする意図を見出している。[11]

これらに共通しているのは、ジャンル全体の特性を考察する点、あるいは 15 世紀後半以降の『手引』に主眼が置かれている点である。いいかえれば、『手引』の編纂が始まった初期、14 世紀から 15 世紀前半にかけての個々の『手引』の内容は、上記のような文脈においては考察されていない。例えば大黒が考察の中心としたコトルッリの『手引』では、その中心を占める内容が、商業活動における生の情報から算術などの知識や商人としての倫理観を説いた論説へと移行しており、[12] またフークらの研究においても、15 世紀末以降の『手引』の内容の主体はやはり「算術」である。すなわち、同じ『商売の手引』という著作ジャンルに内包されるといっても、その内容の主体は編纂された時代によって大きく変化しているのである。

『手引』という著作ジャンルの初期における編纂中心地は北イタリアであり、特にフィレンツェとヴェネツィアの 2 つの都市であった。14 世紀において編纂された『手引』は 10 篇が現存しており、その内 6 篇がフィレンツェ商人によるものとされ、残りの 4 篇はヴェネツィア起源とされている。[13] この時代の両都市の『手引』を概観したウーゴ・トゥッチは、前者を libro、後者を tariffa という言葉で特徴づけた。[14] かれは両都市の商業活動の形態の違いを背景に、その差異を、おおやけに広められていたか否か、という点にあるとする。この指摘は重要ではあるが、以下で考察するように、公的／私的という点について両者に大きな違いがあるとは考えにくい。むしろここで注目すべきは、14 世紀の時点でフィレンツェの『手引』が libro、すなわち書物のかたちで編纂されていたことである。『手引』という著作ジャンルの歴史的変遷の初期において、商業活動における生の情報をまとめるにあたり、なぜその体裁に差が生じたのか。それを明らかにするには、イタリア文学史家クリスチャン・ベックが特にフィレンツェ商人を「物書き商人」とよび、その活発な文筆活動の背景として説明したような、かれらを取り巻く都市社会の影響を考察する必要があろう。[15]

---

(10) 大黒「『商売の手引』」、245 頁。

(11) 大黒「『完全なる商人』」、339、348-349 頁。また大黒は以下の著書において、コトルッリの『手引』のほか、17 世紀の 2 篇の『手引』を挙げ、それらに共通して表現されている理想的な商人像を考察している。大黒『嘘と貪欲』、第 III 部第 9 章。

(12) また大黒も、少なくともコトルッリの『手引』が、それまでの『手引』に共通する記述形式を捨て去っていることは認めている。大黒「『完全なる商人』」、352 頁。

(13) Orlandi, *op. cit.*, pp. 19-30. また、以下も参照。大黒俊二「『商売の手引』一覧——13 世紀から 18 世紀まで」『人文研究』第 38 巻、1986 年。

(14) Tucci, Ugo, 'Tariffe veneziane e libri toscani di mercatura', *Studi Veneziani*, 10, 1968, pp. 65-108.

(15) Bec, *op. cit.*. ベックはその著作の考察を通して、かれらが 1340 年代以降の同都市内外からの危機に対して何よりも確実性を重視するようになり、また「市民」意識を強めていった、と分析する。また以下の研究では 14 世紀のイタリアにおける著述家を分析し、その出身地を都市ごとにデータ化している。Bec, 'Lo statuto socio-professionale degli scrittori', *Letteratura italiana*, Vol. 2, Torino, 1983.

以下、本稿ではこうした観点から、14 世紀のフィレンツェ商人ペゴロッティの『手引』をとりあげ、その特徴を同時代のヴェネツィアの『手引』と比較する。[16] そして編纂の背景としての当時の都市社会と照らしあわせることで、商人の社会的地位が『手引』の特徴と編纂意義にいかなる影響を与えていたのかを考察する。これを通じて、商人にとって書物のかたちで『手引』を編纂する行為は、ただ情報をまとめ伝達するためだけではなく、自らの職業とその活動を顕示するためのこころみでもあったことが明らかになると考える。

2　ペゴロッティの『手引』

フィレンツェ商人ペゴロッティの手による『手引』[17]の原著は 1340 年ごろに編纂されたと考えられており、現存する史料は、1472 年に写されたものである。[18] その原題は「諸地域および商品の度量法の記述〔…〕の書 Libro di divisamenti di paesi e di misure di mercatantie…」といったものであり、『商業の実務 La pratica della mercatura』なる呼称は後年に刊行された際に冠された。[19] その内容はおおまかに、約 7 割を占める「市場解説」の部と、それに続く「その他の知識」の部との、2 部に分けられる。[20]

原著者であるフランチェスコ・バルドゥッチ・ペゴロッティは、アラン・エヴァンズによれば、1290 年以前にフィレンツェにおいて誕生し、1310 年までにはバルディ商会に加入しており、同商会の商人として以後活動した。[21] 1315 年にアントウェルペンに派遣され、ロンドンやキプロスなどに移り、遠隔地におかれた商会の拠点の責任者を歴任し、1331 年にフィレンツェに戻った。1346 年には、同都市における最高役職の 1 つである「正義の旗手」にも選出されている。しかし同年、バルディ商会は破産し、その事後処理における筆頭として政府および債権者らから指名をうけたとされる。不幸にも所属する商会の破産に巻き込まれるかたちで閉じたものの、かれの経歴からは、フィレンツェ都市内、および所属アルテ（同職団体）においても実力者として認められていたことが想像できる。[22] 広範囲にわたる商業活動に従事し、都市政治にも進出するといった、中世イタリア商人の典型的な成功例といえよう。

では、そのペゴロッティによる『手引』の内容とはいかなるものか。まず巻頭に付されてい

(16)　紙幅の関係から、ヴェネツィアの『手引』の個別考察は別稿を参照されたい。拙稿「ヴェネツィア商人たちの『商売の手引』」『パブリック・ヒストリー』第 7 号、2010 年、76-85 頁。

(17)　本稿で史料として扱うものは 1936 年にエヴァンズにより、史料批判を加えたうえで刊行されたものである。Pegolotti, Francesco B. (Evans, Allan, ed.), *La pratica della mercatura*, Cambridge Mass., 1936, rep., New York, 1970. 以下、*Pegolotti*。

(18)　現存する史料は、同じくフィレンツェ商人であったフレスコバルディなる人物によって写されたものである。その記述によれば、現存する史料は原著から 130 年の時代を経て、その間に 1 回の筆写を介していることがわかる。*Pegolotti*, p. 3.

(19)　Pagnini, *op.cit.*; *Pegolotti*, p. ix.〔 〕内は筆者によるもの（以下同）。また、原題は巻頭に記されている。*Pegolotti*, p. 3.

(20)　ただし、こうした 2 部構成が史料中において明示されているわけではない。

(21)　*Pegolotti*, p. xv. 以下ペゴロッティの経歴については、エヴァンズの調査を参考としている。

(22)　アルテと「正義の旗手」の選出に関しては、後述する。

る目次に続く「序文」ともいうべき部分から検討しよう。[23] ここでは、はじめに本文中で使用されている様々な単位や商業活動に関する基本的な語句についての解説がなされる。

「トスカナではメルカート mercato、いくつかの言語ではピアッツァ piazza。
ジェノヴァではバザッラ bazarra およびラーバ raba〔…〕。
これらの名は町や集落、村において商品が売買され――〔それは〕人々や家畜の生活必需品を得る手段であり――、継続して置かれ、その期間は通常 1 週間ないし、1 年に 1 か月である場を意味するものである」。[24]

ここに挙げた例は「市場」の説明だが、「市場」が各地域ではどのようによばれるか、だけではなく、語句そのものの意味をも説明している。こうした序文の語句説明に、商人ならば当然知っておくべき単位や語句の説明が含まれていることをふまえれば、『手引』が商人やフィレンツェ人といった特定の集団だけではなく、そうした知識になじみがないような者たちを含めた、より広い層に読まれる可能性を、少なくともペゴロッティが意識していたといえよう。[25]

「序文」に続いては、「市場解説」の部が展開される。[26] ここではそれぞれの市場ごとの情報が次々に列挙される。例えばフィレンツェの項では「フィレンツェ自身について、そして君たちが商品を売買する際のはかり、尺度について」という見出しに続いて、当時用いられていた様々な種類のはかりとそれぞれ扱われる商品についての情報が列挙される。[27] 次に各市場との関係が、1 行ごとに改行を繰り返すという『手引』における特徴的な記述形式で説明される。以下はその例である。

「フィレンツェのスタデラでの 100 リブラは、ピサでは 105 リブラになる。
フィレンツェでの 40 ブラッチャは、ピサでは 34 ブラッチャになる。
フィレンツェでの 1 リブラの銀は、ピサでは 12 オンチャ、8 デナーロになる。
ピサでの 1 スタイアの小麦は、フィレンツェでは 2 スタイアと 16 分の 11 コルモになる。
ピサでの塩を量る 1 スタイアは、フィレンツェでは 33 スタイアになる」。[28]

---

(23) 本稿では、史料中の次の部分を「序文」とする。*Pegolotti*, pp. 14-20.

(24) *Pegolotti*, p. 17.「店舗」などに関しても同様の形式をもって説明がなされている。

(25) またペゴロッティはこの序文の最後に、14 世紀初頭に作られた、商人の美徳を挙げ、後進の商人たちに理想の商人像を教訓的に示すような詩の言葉を引用している。*Pegolotti*, p. 20. ロペツらによれば、これはディーノ・コンパーニの作である。Lopez, R. S., and Raymond, I. W., *Medieval trade in the Mediterranean world*, Columbia Univ. Pr., New York, 1990, p. 409, pp. 425-426. こうした文章を書物の巻頭におくことにより、これから『手引』を読み進めていく読者に対して、商人とは正義を重んじ、温和と節制を心がけ、教会に忠実である、ということを印象付けているとも考えられる。

(26) 本稿では、次の部分を「市場解説」とする。*Pegolotti*, pp. 21-277.

(27) *Pegolotti*, p. 190.

(28) *Pegolotti*, pp. 197-203.

このようなピサとの関係に続き、他のイタリア諸都市に加え、コンスタンティノープルからロンドンまでの 29 の市場との対照関係が、それぞれ「〔フィレンツェ〕と～　con ~」という見出しをともなって説明される。これが 1 つの市場に関する解説の形式であり、同様のかたちで 50 弱の都市、地域が解説されている。

その地理的範囲は地中海世界を超え、黒海からフランドルやイングランドまでに及ぶ。こうした情報の地理的範囲の広さは、当時のフィレンツェ商人の関心の広さを示し、同時に実際の商業活動の範囲の広さを示していることはいうまでもない。しかしそうした膨大な情報の羅列のなかにも、項目ごとの記述には多寡がある。フィレンツェの毛織物輸出および穀物輸入の相手として重要な市場であったコンスタンティノープル、ペゴロッティ自身が滞在した地でもあるキプロスのファマグスタ、重要な交易品である羊毛の輸入元であるイングランドなどの詳細な説明は、そのまま著者の足跡をたどるものや、フィレンツェとの関係の深さを反映したものといえよう。

しかしながら、例えばターナに関する解説[29]ではジェノヴァが対照相手になるなど、黒海地域の市場ではコンスタンティノープルも含めて、対照相手がフィレンツェになる項目はエフェソスを除いてみられない。これらの情報は自身の活動からのものではなく、ジェノヴァやヴェネツィアなどを基準とした、他の資料、同様の『手引』などから引用した可能性が高く、ペゴロッティは当時手に入りうる膨大な情報を、まさに「詰め込んだ」と考えることができる。

この点に関してエヴァンズは、アンコーナの項目においてフィレンツェとの対照関係が説明されているにもかかわらず[30]、フィレンツェの項目でアンコーナとの対照関係が重複している点[31]、またこの重複する説明において、対照される単位などは同じであるものの、その数値にずれが生じている点を指摘している[32]。もしペゴロッティが、自らの活動の中で得た情報をもとにしているとすれば、こうしたずれが生じることはなく、そもそも情報の重複も生じないはずである。ペゴロッティが他の資料からこれらの情報を引用した可能性が示唆されている。この、『手引』の内容がフィレンツェ人としての著者の関心を反映しつつも、情報の範囲はフィレンツェ商人の活動の枠組に収まりきらない、という点には注意すべきである。そこには、当時のイタリア商人の関わった商業世界の全体が再現されているといえる。

またこの「市場解説」は、上述のように必ずしもフィレンツェを各市場との対照相手としないだけでなく、同都市を巻頭に置くといったような、特別扱いをしていない[33]。フィレンツェは著者やその商会にとって最も重要な本拠地であるが、フィレンツェ商人にとっての利便性が

(29)　*Pegolotti*, pp. 23-24.

(30)　*Pegolotti*, p. 161.

(31)　*Pegolotti*, p. 202.

(32)　*Pegolotti*, p. xlv.

(33)　こうした情報の配列の問題は、現存する史料が写本であるため、その筆写までの期間における操作についても注意しなければならない。しかし、フィレンツェの項におけるほぼすべての対照相手の市場が、フィレンツェの後に解説されているか、個別の項をもたないかのいずれかであることから、この点は解決できるのではないかと考える。

優先されているとはいえないのである。このことから、この『手引』の想定する読者は、先の「序文」においてもみられたように、必ずしも著者の商会やフィレンツェ商人というグループに限定されていないという可能性を含んでいる。(34)

残る「その他の知識」の部では、「市場解説」のように市場ごとに項目を設けて解説していく形式にはなじまない情報や、商業に関する知識が収められている。(35) ここではまず布の長さの単位や各地域の貨幣に使われる金、銀の含有率が列挙され、数々の特産品の名前が挙げられていく。ここまでは市場解説と同様、情報の列挙という形式をとっている。(36) しかし、これ以降は項目の羅列から比較的叙述的な記述へと変化する。例えば、様々な商品の質のよしあしについて簡単な絵を付けて説明したり、金や銀の精製および合金比率の説明では算術の練習も兼ねた出題形式をとったりしている。(37)

この「その他の知識」において注目しておきたい点は、算術の問題や商品の説明など叙述的な記述がなされる部分では、読者に対して「君（たち）tu / voi」を用い、著者からの問いかけをしていることである。この点は、ペゴロッティが読者の存在を意識し、記述を通して知識を伝えようとする姿勢がうかがわせる。このことから、ペゴロッティの『手引』は単なる日々の商業活動からの情報の集積という性格だけではなく、文字を通しての情報・知識の伝達手段という性格をあわせもっていることが読みとれる。

最後に全体としての内容構成についても触れておきたい。この『手引』には巻頭に、写本の筆写時点で既に存在していた目次が付されており、(38) その後これまで述べてきたような各部が続いている。注目すべきは各種の説明が混在することなく、それぞれが1つの部としてまとまっている点である。特に「市場解説」の部は、各市場が東から西、南から北という流れで整然と並べられている。活動の中で得られた情報の集積を、無差別にひとまとめにするのではなく、一定の構成を保ちながら編纂しようとする意図は、原題が「書 libro」となっていることにも反映されている。14 世紀後半以降の他のフィレンツェ商人の手による『手引』も、扱われる市場の数や情報量の多寡は異なるが、やはり「市場解説」が先に配置され、全体の大部分を占めている。(39) このことから、フィレンツェ商人の『手引』は「市場解説」として各市場の情報が主体として最初に述べられ、「その他の知識」はその後に付随的に含まれる、という体系立っ

(34) この点に関し、例えば、中世商人たちの「信頼関係の構築」を考察する研究の中で、教訓的な書物として『手引』を概観したダールのように、ペゴロッティの『手引』はバルディ商会内部にむけて編纂されたものであるとする見解もある。Dahl, Gunnar, *Trade, Trust, and Networks*, Nordic Academic Pr., 1998, p. 238.

(35) 本稿では、次の部分を「その他の知識」とする。*Pegolotti*, pp. 277-383.

(36) *Pegolotti*, pp. 277-302.

(37) *Pegolotti*, pp. 331-358.

(38) 目次がいつの時点で付されたのかは定かではないが、フレスコバルディの時代には既にあったと考えられている。*Pegolotti*, pp. xi-xiii.

(39) 例えば、以下の 2 つの『手引』が例として挙げられる。前者の原著は 14 世紀末、後者は原著の年代は不明であるが、現存する最古の史料は 15 世紀中期のものである。*Il manuale di Saminiato de' Ricci*, a cura di A. Borlandi, Genova, 1963; *El libro di mercantanie et usanze de' paesi*, a cura di F. Borlandi, Torino, 1936, ristampa, Torino, 1970.

た構成において共通しているといえる。

以上がペゴロッティの『手引』の内容となるが、上述のように現存する史料は、それが編纂された 14 世紀のものではなく、15 世紀に筆写された写本である。ここに「詰め込まれた」情報とは、はたして後から参照する者にとって生きた情報たりえるのか、という疑問も残る。実際に写本筆者であるフレスコバルディの、筆写時における情報に対する姿勢は、情報の記述の中に空欄がしばしばみられる点[40]、見出しはあるがその内容は記述されていない項目がある点[41]、各年の復活祭の日付一覧表が更新されていない点[42]などから、実際に商業活動の中で活用するにしては、正確性に欠けるといわざるをえない。筆写の時点では、ペゴロッティの『手引』は 1 世紀以上も前のものであり、そこに含まれ、伝達される情報の有効性に限界を感じていたのではないかと考えることができよう。しかしながらそうした収録されている情報の不正確さにもかかわらず、この写本自体は型押しされた皮の表紙が付けられ、上質の紙の上に華やかな装飾とともに筆写される、1 冊の書物として豪華本の装丁がなされている[43]。以上のことから、フレスコバルディは自らが筆写する情報の有効性について疑問をもっていたこと、またそれを承知のうえで、ペゴロッティの『手引』を豪華本として筆写する価値があるものとみなしていたことが想定される。先達がのこした『手引』に、実用目的ではない、「書物」としての価値を見出していたと考えることができよう。

ここまでの考察で、ペゴロッティは自ら活動規模や範囲を超えるほどの膨大な情報や知識を、商人に限定されない読者層を意識しながら、「書」のタイトルのもとに体系だてて編纂したことが明らかとなった。しかしながら、こうした編纂のかたちは、同時代のヴェネツィア商人たちの『手引』と比較すると明らかに異なっている。ゆえに次章ではヴェネツィアの例との差異を確認したうえで、それを手がかりに 14 世紀のフィレンツェ商人が『手引』を「書物」の形に編纂する意義について考察していく。

3　文化的行為としての『手引』編纂

先に挙げたように、トゥッチはフィレンツェ商人の手による『手引』を「書物」を意味する libro という言葉で表現した。この言葉は、1 人の編者の手によって体系的に内容をまとめたもの、というペゴロッティの『手引』にもみられた特徴を表しているといえる。

一方で、ヴェネツィアの『手引』をさす tariffa という言葉には情報を公にする、もしくは拡

(40)　エヴァンズは、アンコーナにおいて使用されている貨幣に関する項目を例に挙げている。*Pegolotti*, p. xi.

(41)　例えばアルメニアのアヤスに関する項目では、カンディアやロンドンとの見出しはあるが、その内容は記述されていない。*Pegolotti*, p. 63.

(42)　1340 年から 1465 年までである。*Pegolotti*, pp. 324-325.

(43)　*Pegolotti*, pp. xi, xiii.

散するという意味が含まれている、とトゥッチは説明している。[44] 実際のヴェネツィアの『手引』の内容は、本稿で考察したペゴロッティの『手引』とその写本とは異なり、商業情勢の変化が反映されたものとなっている。例えばペゴロッティと同時代の 14 世紀前半に、2 篇の『手引』の原型が編纂されている。両者の編纂年代には 30 年ほどの開きがあるのだが、そこで東地中海の交易拠点として挙げられている市場が、それぞれの編纂当時の状況を反映するかたちで変更されている。[45] その体裁も寄せ集めや雑記帳のようであり、1 人の商人が編者として情報や知識を体系立てて、いわば 1 冊の書物としてまとめようとする意図もみられない。[46]

トゥッチや、ヴェネツィアの『手引』の 1 篇の英訳版を刊行したジョン・ドットソン[47]らは、この両者の違いが生じる理由を、それぞれが編纂された両都市の経済活動の形態に求めている。すなわち、有力なアルテを形成するいくつかの強大な大商会によって国際商業が占められていたフィレンツェでは、商会内で参照される私的な書物として『手引』が編纂された。一方で、都市当局の管理下のもとで不特定多数の商人や商会が同時に 1 つの事業に従事するヴェネツィアでは、商業における知識や伝統、態度などの共通の基盤を与えるために『手引』が公的なものとして存在していた、と説明されている。[48] この説明は、ある程度の有効性をもっている。というのも、情報の更新を特徴とするヴェネツィアの『手引』が、情報の体系性よりも活用するにあたっての利便性を重視していたのは確かだからである。しかし前章で明らかにしたように、ペゴロッティの『手引』も、その内容の範囲や文体から、所属する商会内部に読者を限定しておらず、また先行する『手引』やそれに類する情報源を参照していたと考えられる。このように、フィレンツェの『手引』も秘匿されていた私的書物では決してなく、この点においてさらなる説明が必要であろう。

それを明らかにする手がかりとしては、両都市における商人がおかれた社会的立場の影響が考えられる。ヴェネツィアにおいて国際商業に従事していた商人は、貴族あるいは上層市民として、固定化された社会的階層に属していた。いいかえれば、ヴェネツィアにおいては金儲けの仕事をするもの、すなわち商人は社会的身分の保障がされていた、ということである。[49] では、こうした後ろ盾のないほかの都市の商人たちは、いかにして都市社会における権威を確立する

(44) Tucci, op. cit., pp. 89-90. この tariffa という言葉は、現代イタリア語では関税表や料金表という意味をもっている。しかしトゥッチは、この単語は、もとはアラビア語に起源があり、ここでは「報せ notizie」や「一覧 notificazione」という言葉に近しい意味をもっているとし、また libro には無い「義務づけ obbligatorietà」の意味合いが含まれる、と述べている。

(45) この点に関しては、拙稿、前掲論文を参照されたい。

(46) 例えば、1 篇のヴェネツィア商人の『手引』の刊行版に前文を執筆したチェッシは、その『手引』の前半部を、後半部とペゴロッティの内容との寄せ集めである、と表現している。*Tarifa zoe noticia dy pexi e mixure di luoghi e tere che s'adovra mercadantia per el mondo*, a cura di V. Orlandini, Venezia, 1925, pp. 5-6.

(47) Dotson, John E., *Merchant culture in fourteenth century Venice: the Zibaldone da Canal*, New York, 1994.

(48) Tucci, op. cit., pp. 90-92; Dotson, *op. cit.*, pp. 24-27.

(49) 例えばマクニールは、ヴェネツィアにおける中世末期の文化交流に関する概説の中で、以下のように表現している。「ヴェネツィアが制度的に安定しているため、〔…〕金もうけの仕事は、なんら知的弁論を必要としない。昔からの慣習がそれを完全に是認しているからである」。W. H. マクニール著、清水廣一郎訳『ヴェネツィア――東西ヨーロッパのかなめ、1081-1797』岩波現代選書、1979 年、111 頁。

ことができるのか。筆者はこの点にこそ、特にフィレンツェにおいて『商売の手引』が、ヴェネツィアのものにはみられない書物のかたちをもって編纂された理由があると推察する。

当時のフィレンツェ都市社会と商人たちを結び付けていたものは、「アルテ」とよばれる同職団体であった。21 のアルテのうち、裁判官と公証人、毛織物業者、両替商、医者と薬屋、毛皮商、絹織物業者、そして遠隔地商人の 7 つが大アルテとして事実上都市の権力を握った。[50] 当時のフィレンツェの政治体制は共和制であり、その執政府は全アルテ員のなかから選出されることになっていたが、この全てが 7 大アルテに所属するもので構成された。その選出員はプリオリとよばれ、このプリオリ議会の議長として選ばれるのが、ペゴロッティもその役職を務めた「正義の旗手 gonfaloniere di giustizia」である。[51] このように、商人たちはその経済的成功を背景に、アルテを基礎とした都市の政治体制において、ともに大アルテを構成していた他の職業と同等もしくはそれ以上の権力を手にするにいたった。

しかし社会的地位の保障という点においては、商人たちは遅れをとっていたとみることができる。商人の権力基盤である経済活動は流動的なものであり、恒久的な社会的地位の裏付けにはならなかった。その顕著な例が、1340 年代の不況期である。1330 年代まではフィレンツェ経済は安定していたものの、百年戦争の勃発を契機に停滞状態へと陥ることとなった。商人たちの巨額の融資をうけていた国王たちが、財政事情の悪化によって返済不能に陥ったのである。この国際的な金融・経済活動の混乱は、特にバルディ商会のような遠隔地商業を営む既存の大商人層に深刻な損害を与えた一方で、「新参者」とよばれる、それまではローカルな活動を基盤とする中小アルテで力を蓄えていた新興勢力の進出を大いに促したのである。[52] あくまでもペゴロッティの『手引』の最終的な編纂年代は不明であり、この不況期における権力層の新陳代謝との関連を断定することはできないが、[53] 商人の立場の不安定さを示す一例といえよう。

これに対し、大アルテに属する職業のうち、法学や医学を修めたものは、金や銀のバックルや長いローブといった名誉や権威を象徴する衣装を身に付ける権利をもつなど、聖職者と並ぶ権威と名誉を与えられていた。[54] その根拠となっていたものは、大学における高等教育および書物を通した教育と知識の共有であった。両者が修めた医学・法学という学問は、当時の大学において神学と並ぶ上級学部として他の学科の上位に置かれていた。[55] 両者のアルテの加入審査においても、大学において学位を取得した者は、それぞれの学問に関する知識や理論を問わ

(50) 齊藤寛海『中世後期イタリアの商業と都市』知泉書館、2002 年、328-333 頁。

(51) 齊藤、前掲書、319-320 頁。

(52) 「新参者」とよばれる人々は、中小アルテから大アルテに徐々に移行し、大商会の衰退に乗じるかたちで遠隔地交易に進出する。結果として 1346 年には政権の中枢議会の半数を占めるようになった。Brucker, Gene A., *Florentine Politics and Society: 1343-1378*, Princeton Univ. Pr., 1962, pp. 106-107.　また 14 世紀を通してのフィレンツェの権力体制の変遷については、次が参考になる。齋藤、前掲書、323-327 頁。

(53) エヴァンズは、ペゴロッティの『手引』の編纂年代を 1332 年から 1345 年の間と想定している。*Pegolotti*, pp. xxx-xxxiv

(54) Park, Katharine, *Doctors and Medicine in Early Renaissance Florence*, Princeton Univ. Pr., 1985, pp. 122-123.

(55) ジャック・ヴェルジェ著、野口洋二訳『ヨーロッパ中世末期の学識者』創文社、2004 年、39 頁。

れる試験を免除された点で共通している。[56]

また、権威的として認識される書物があり、それらを通して知識を学び、共有している者たちが職業集団を構成している点でも、両者は共通する。医学に関していえば、その根底に流れているものはアリストテレスによる自然哲学であり、その解釈としてガレノスの著作が中世を通して権威を誇っていた。[57]その他に古代ギリシャのヒッポクラテスや、イスラムのアヴィケンナの著作がラテン語に訳され、大学における理論、実践、外科手術の修得において広く用いられていた。[58]また、医者の葬式に際しては書物を背負った馬が列に参加するなど、書物が医学を修めた者の象徴として認識されていたことがわかる。[59]一方で中世の法学においては、13世紀までに成立していた『ローマ法大全』と『カノン法大全』がもっとも権威ある書物であり、[60]大学だけではなく、13世紀に既に存在していた法学校において、注釈書と共に法理論の修得に用いられていた。[61]法学を修めた者は裁判官や弁護士、法律顧問などの職に就き、実践的な知識は法廷で学ぶことが常であった。また修めた知識の性質から、行政官からの要請に応じて助言を与えるなど、都市社会における法律に関する面において重要な役割を担っていた。こうした重要性から、15世紀初頭のフィレンツェにおいては、結婚式や公的な行列において騎士身分の次に位置することが許されるなど、特権的な地位が与えられていた。[62]

ここで商人たちに視線を戻してみると、かれらにとってまず必要とされたものは「読み書き」の能力であり、何よりもその修得が求められた。読み書きの修得については、早ければ早いほうが良いと考えられていたようで、商人たちの残した文献史料にも、そうした考えを示す記述が残っている。例えば14世紀後半のフィレンツェ商人、パオロ・ダ・チェルタルドは、その人生訓の書の中で、商人の息子たちは6、7歳から読み書きを学ぶべきであるとの考えを示し

---

(56) Park, *op. cit.*, pp. 58-59; Martines, Lauro, *Lawyers and Statecraft in Renaissance Florence*, Princeton Univ. Pr., 1968, pp. 31-32.

(57) ヴェルジェ、前掲書、41頁。

(58) Park, *op. cit.*, pp.59-60. ボローニャ大学では医学部においては4年が通常の修学期間であった。その課程においては理論修得が中心であり、1日につき3回の講義がおこなわれていた。また、ラテン語からイタリア語へ翻訳されたものもあり、これらは実務において利用されるとともに、修道院や知識人たちの間で読まれていた。*Ibid.*, p. 48

(59) *Ibid.*, p. 122. 他にも通常の倍の数のトーチが用いられるなど、特権的地位を獲得していたことがわかる。

(60) ヴェルジェ、前掲書、43-44頁。『ローマ法大全』は12世紀初頭のイルネリウスによるものが中世を通して用いられ、『カノン法大全』は、12世紀後期に、グラティアヌスの『教令集』をもとに、以後4人の教皇による教令集をまとめるかたちで成立した。

(61) Martines, *op. cit.*, p. 38. 1228年において、ボローニャにはすでに、大学における法学の修得に準ずるかたちで、公証人のための法学校が設立されていた。また、フィレンツェにおける法学者たちは、カノン法なら通常6年、ローマ法なら通常7-8年大学に通うことで学位を得ていた。*Ibid.*, p. 81.

(62) *Ibid.*, pp. 30-33. また、公証人たちも公的文書の作成を担当するなど、都市社会の法律面に関わっていた。かれらはその文書作成において、独自の専門語を用いており、13世紀にはすでにその用法が確立していた。公証人もまた、書物を通した教育をうけ、技術を確立していたといえる。以下は、この点に関する研究である。McGovern, John F., 'The Documentary Language of Medieval Business', *The Classical Journal*, Vol. 67, 1972, pp. 227-239.

	第1期		第2期		第3期		14世紀	
	総数	商人	総数	商人	総数	商人	総数	商人
ピエモンテ・リグリア	2	0	1	0	3	0	6	0
ロンバルディア	8	0	15	0	12	1	35	1
ミラノ	2	0	7	0	6	0	15	0
ヴェネト	35	3	28	1	42	1	105	5
パドヴァ	12	0	10	0	14	0	36	0
トレヴィーゾ	3	0	0	0	0	0	3	0
ヴェネツィア	4	0	5	0	22	0	31	0
ヴェローナ	3	0	4	0	14	0	21	0
ヴィツェンツァ	2	0	2	0	2	0	6	0
エミリア・ロマーニャ	14	0	18	0	28	0	60	0
ボローニャ	10	0	10	0	24	0	44	0
フェラーラ	0	0	3	0	7	0	10	0
ラヴェンナ	2	0	3	0	0	0	5	0
トスカナ	38	10	51	16	39	10	128	36
アレッツォ	4	0	0	0	0	0	4	0
フィレンツェ	19	7	26	11	26	9	71	27
ルッカ	0	0	2	0	0	0	2	0
ピサ	3	0	5	2	7	0	15	2
ピストイア	2	0	0	0	0	0	2	0
シエナ	5	3	7	2	0	0	12	5
マルケ	6	0	2	0	3	0	11	0
ウンブリア	12	1	10	0	5	0	27	1
ペルージャ	7	0	7	0	0	0	14	0
ラツィオ	10	1	6	0	12	0	28	1
ローマ	4	0	4	0	6	0	14	0
メッツォジョルノ	10	0	18	2	4	0	32	2
ナポリ	7	0	13	2	3	0	23	2

表　13-14 世紀における著述家の出身地

Bec, 'Lo statuto socio-professionale degli scrittori', p. 237 より作成

第 1 期：1235-1290 生（以下同）／第 2 期：1290-1325 ／第 3 期：1325-1370

ている。[63] 次に必要とされた能力は、数字をあやつるための算術であり、こうした初等技術を修めた後は、何よりも経験が重要視されていた。14 世紀末期から 15 世紀初頭にかけてのフィレンツェ商人、ジョヴァンニ・モレッリが残した覚書には、早いうちからの徒弟修業の必要性が説かれ、遠隔地へと赴き、3 年から 4 年は一定の市場に定着して経験を積むことの重要性が示されている。[64] モレッリにとってはこうした経験が、商人として成功するために最も重要であったことがわかる。いいかえれば商人たちにとって、当時の職業の社会的地位を決定していた、大学における高等教育や書物を通した専門教育といったものは無縁の存在であったといえる。

しかし書物との関係性でいえば、特にフィレンツェ商人たちは、商業活動のなかで獲得した「読み書き」の能力を活かし、書物そのものには既に慣れ親しんでいた。ここに挙げた表は 13-14 世紀に書物を著した著述家の出身地、職業を分類[65]したものであるが、トスカナ地方、およびフィレンツェにおける商人の占める割合が高いことがわかる。無論、都市ごと、地域ごとの史料偏在の問題があり、絶対数では参考にならない点は否めない。それでも、総数に対する割合で考えてみても、フィレンツェの特色がはっきりと現れている。結果として、商人による著作活動が 14 世紀に入る時点ですでに他の都市に比べて活発であった点、書物をなすのに充

(63)　Branca, Vittore, a cura di, *Mercanti Scrittori: Ricordi nella Firenze tra medioevo e rinascimento*, Milano, 1986, p. 36. 本書はブランカによって、パオロ・ダ・チェルタルド、ジョヴァンニ・モレッリ、ボナコルソ・ピッティら、中世末期からルネサンス期にかけてのフィレンツェ商人の手による「覚書」をまとめ、刊行されたものである。

(64)　*Ibid.*, pp. 177, 196.

(65)　ただし、ここでいう著述活動には、『手引』のような実務書に類するものは含まれていない。

分な素地があった点が示されているといえる。

これらのことから、ペゴロッティがその『手引』において、自らの活動範囲を超えるほどの分量の情報や知識を盛り込んだ理由の1つを説明することが可能である。すなわち、自らが活動している商業の世界の全体を、自らの得た情報を用いて当時の権威の象徴であった書物の中に再構築し、体系立てられた1冊の書物として提示し、そのうえで商人は、他の者と共有するに値する情報や知識を、書物を通じて伝え、それらにもとづいて実務に取り組んでいることを顕示する必要を感じていたのではないか、と考えられる点である。無論、情報管理や後進育成といった、これまで『手引』に関してなされてきた説明を否定することはできないが、それらをして書物というかたちにおいて『手引』が編纂された理由とするには、不充分であろう。情報を管理し、参照する目的によるならば、商人たちがその活動において依拠していた、手紙を用いた頻繁な交換・伝達をもとに、必要に応じてメモを作成すれば良いはずである。実際に書物のかたちで編纂された『手引』に蓄積された情報では、刻々と変化する市場の状況には即応しきれない。後進の育成という目的においても同様であり、長期的に変化しない類の知識や技術を除けば、常に更新される情報を参照させた方が、より効率的である。むしろ、これら2つの目的は、商業世界の再構築と顕示という目的に包含されていたと考えるべきである。

以上の考察から、フィレンツェ商人にとっての『手引』編纂という行為とは、商人が非常に膨大な情報や高度な技術や知識を、体系立てて伝えあい、共有しあう職業集団であるという実態、あるいはそうありたいとする理想像を顕示するための手段[(66)]、として位置づけることができる。またこのことは、商人たちにとって近しい存在であった、医学や法学を修めた者たちをモデルとし、同様に教育の場や実践の基盤となる知識に書物をもちこむことで、自らも権威を得ようとするこころみであったとも考えられる。医学や法学の専門知識に対して、ローカルな商業ではなく遠隔地商業のなかでしか知りえない地理的情報など、実用の範囲を超えるほどの、知りえた限りの情報、知識が『手引』の中に詰め込まれ、顕示されているのはそのためである。権力や経済力の面では他者を圧倒していた富裕商人の典型例たるペゴロッティが、大商人ならではの巨大な情報、知識の集積体といえる『手引』を編纂したことは、上記のような『手引』に対する解釈に一致している。

おわりに

本稿ではフィレンツェ商人ペゴロッティの手による『手引』の特性を明らかにした。それをヴェネツィアの『手引』と比較した際には、体系性と書物という形式が浮き彫りとなった。同時に『手引』の編纂とは、フィレンツェにおいては商人たちの社会的地位の向上を目的としたこころみであった、と推察した。その結果、商人たちが自分たちの手にある情報をもとに、商

(66) 本稿第2章註25を参照。この記述は、著者の理想の商人像を端的に示すものであると同時に、商人の商業活動に対する姿勢の表明であるとも考えられる。また、すでに商人が同時代の文学作品に触れていたことを示す例でもある。

業の世界の実態を表現し、顕示しようとしたものとして『手引』を解釈する可能性が示された。これは、ヴェネツィアの『手引』の特性、あるいは同都市における商人の社会的地位からは表れないものである。同様の史料群における、フィレンツェの『手引』としての類型といえよう。

『手引』はこれ以降、高度な知識体系を伝えるものとして、直接的に情報を参照する手段として「取引現場で「使う」ものから、知的興味にひかれて「読む」もの」[67]へと変化をとげていく。本稿で考察したペゴロッティの『手引』は、知識体系としての、もしくは専門的な学問の書物としての『手引』の前段階として、商人たちが自らの属する職業集団を書物を通して表現し始めた第一歩であるとみなすことができる。このように、『商売の手引』としてひとまとめにされてきた史料群も、各時期や地域ごとに考察することで、ジャンル全体の中で改めて評価することが可能になる[68]。本稿はそうしたこころみを、『手引』の成立過程における初期段階のものに対しておこなったものである。

(67)　大黒、「『完全なる商人』」、351-352 頁。上記に加え、飾り文字の多用などの外観の変化も含めて、『手引』が文学作品に接近する、ともしている。

(68)　大黒、「『商売の手引』」、268-269 頁。大黒もさらなる個別研究が必要であるとしているが、現在までそうした研究のこころみはほとんどみられない。